

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



40

よろこびの知らせ
第40集

目 次

希望を歌う	1
ルカ 1:67-79	
平和を歌う	10
ルカ 2:8-14	
喜びを歌う	19
ルカ 1:39-45	
愛を歌う	28
ルカ 1:46-55	

ここに収められたメッセージは、2022年11～12月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

希望を歌う

ルカ 1:67-79

1:67 さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った。

1:68 「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、

1:69 救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた。

1:70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。

1:71 この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。

1:72 主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、

1:73 われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、

1:74 われらを敵の手から救い出し、

1:75 われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。

1:76 幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、

1:77 神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。

1:78 これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、

1:79 暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く。」

クリスマス前の4回の日曜日は、「アドベント第1主日」、「第2主日」、「第3主日」、「第4主日」と数えます。一週ごとにアドベント・キャンドルを灯してクリスマスを待ち望みます。アドベント・キャンドルの一つひとつには名前とテーマがあります。最初のキャンドル

は「預言のキャンドル」と呼ばれ、テーマは「希望」です。次は「天使のキャンドル」で、テーマは「平和」、その次は「羊飼いのキャンドル」で、テーマは「喜び」、そして最後が「ベツレヘムのキャンドル」で、テーマは「愛」です。この期間、こうした4つのテーマを深く想い見るようにしましょう。

一、希望と預言

希望のないところで人は生きることができません。どんなに豊かなものを手に入れても、希望が無ければ、からだは生きていても、たましいは死んでしまいます。けれども、どんな逆境の中でも、たとえ明日をも知れない状態でも、生命の危険にさらされていても、希望があるなら、生き抜くことができます。人は希望さえ失くさなければ、どんなに困難な中でも前に向かって進むことができるからです。

私は、学生のころ、結核療養所に患者を訪ねる奉仕をしたことがあります。ある日、牧師と一緒に重症の方を訪ねました。彼女は、チューブを何本も身体につけ、とても苦しそうでした。けれども、彼女はこう言いました。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのため

に、天にたくわえられているのです。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。」ペテロ第一1:3-5の言葉です。彼女はそれを暗記していて、聖書の言葉通り、正確に口にしました。この苦しみの中でも、神は必ず守り、支えてくださる。たとえば、身体の死がやってきても、キリストからいただいた永遠の命によって、天でキリストと共に生きることができ——その希望を、彼女は、聖書の言葉によって告白したのです。お見舞いに行った者のほうが彼女の信仰によって励まされ、力づけられたほどでした。そして、そのときほど、人に希望を与えるのが神の言葉であることを、強く確信できたときはありませんでした。

希望は神の言葉、とくに神の約束の言葉から来ます。きょうの箇所、ザカリヤは、「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもベダビデの家に立てられた」（68-69節）と言っています。ザカリヤの言葉は、詩の形で綴られていますので、ここは「ザカリヤの歌」と呼ばれています。

ザカリヤは希望を歌いました。とくに、神の言葉に基づく希望を歌いました。「救いの角…」は「救い主」のことで、「ダビデの家に…」は、救い主がダビデの子孫として生まれることを言っています。実際、ザカリヤの子ヨハネの誕生から六ヶ月後、救い主イエスは、「ダビデの子」としてダビデの出身地、ベツレヘムでお生まれ

になりました。このことは聖書にあらかじめ預言されていました。「古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに」（70節）とある通りです。

イスラエルの人々は、バビロンやペルシャ、シリアやローマという大きな国に踏みにじられてきましたが。そんな中でも、神の言葉によって希望を持ち続けました。神の言葉は、個人に希望を与えることはもちろんですが、それを超えて、社会や国家、また民族にも希望を与えます。アメリカは、人々が信仰の自由を求めて建てた国で、13の州からはじまって広大な大陸を開拓し、ハワイやアラスカを加えて50州にまでなりました。アメリカは豊かで強い国になりましたが、アメリカの発展の背後には、人々に希望を与え、社会を支え導く神の言葉がありました。アメリカが神から離れそうになったとき、神はリバイバルを起こして、神の言葉を注いでくださいました。リバイバルの時代には説教者が神の言葉をストレートに語り、人々は神の言葉に聞き、悔い改め、信仰に立ち返りました。アメリカはそれによって、息を吹きしてきました。

アモス 8:11 にこうあります。「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもでもない、主の言葉を聞くことのききんである。』」御言葉の飢饉は、実際の飢饉と同じくらい、いや、それ以上に恐ろしいものです。神の言葉が神の言葉として語られず、聞かれな

くなるとき、人のたましいは枯れ、社会は荒れ果てていきます。私たちは、今、そのようなことを目の当たりにしています。御言葉から来る、ほんものの希望のかわりに、目先の楽しみや、モノの豊かさを追い求めたとしても、そうしたものでは、人のたましいは決して満たされることはないのです。

「希望」を表すキャンドルが「預言のキャンドル」と呼ばれるのは、希望の光は、神の言葉という蠟を燃やしてはじめて輝くからです。神の言葉によって支えられていない「希望」は一時的で、やがて消えていきます。しかし、神を信じる者、神の言葉を握りしめている人は、消えることのない希望を保ち続けることができます。

二、希望と救い

ザカリヤは神の言葉に基づく希望を歌いましたが、次に、救いの希望を歌いました。「救い」といっても、何からの救いでしょうか。ザカリヤは「救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである」

(71節)と言っていますが、この「敵」とは何でしょうか。イスラエルは、ダビデ王朝が滅びてからはずっと、外国に支配されてきました。人々は、外国の支配を「敵」とみなし、そこからの解放を望んでいました。実際、イエスの時代には、「ヘロデ党」や「熱心党」といったグループが政治的な独立のために活動していました。

66年、ユダヤの人々はローマとの間に戦争を起こしました。73年まで続いた「ユダヤ戦争」です。この戦争

で、70年にエルサレムは神殿もろとも滅ぼされました。残った人々は3年間、マサダ砦に立てこもって抵抗しましたが、それも、ついに滅ぼされました。ユダヤのローマへの反乱はかえって人々を苦しめ、人々は祖国を失い、全世界に散らされることになりました。圧迫されている民族にとって政治的独立は悲願です。しかし、その「時」と「方法」を間違えると、かえって、もっと大きな不幸を招くことになります。

貧困に苦しむ人は貧困からの解放を願い、病気に苦しむ人は病気からの解放を願います。誰もが、このトラブル、あの悩みから解放されたいと願います。それは当然のことです。経済活動を盛んにして貧困を解消する。医学の研究を進め、誰もが医療を受けられるようにする。そうした努力は必要なことです。けれども、現実には、一つの問題から解放されたとしても、また次の問題が生じてきます。私たちを苦しめている様々な問題の背後にあるほんとうの「敵」に打ち勝つのでなければ、堂々巡りの苦しみから抜け出すことはできません。

多くの人が気付いていなくても、また、認めようとしなくても、私たちにとっての最もやっかいな「敵」は、じつは私たちの罪です。「罪」によって人は、神に逆らい、神を否定し、その結果、人と人とが互いに逆らいあい、互いに否定しあうようになり、そこからあらゆる問題が生じ、それが人を苦しめるのです。ザカリアは、77節で「罪の赦しによる救い」と言って、神がくださる救いは罪からの救いであると言っています。聖書は救い主

を「罪から救う者」（マタイ 1:21）と呼び、救いのメッセージとは、「罪の赦しを得させる悔改め」（ルカ 24:47）であると言っています。世界の誰ひとりとして、人を罪から救うことができる者はありません。ただひとり、人となられ、わたしたちの罪のすべてを背負ってくださった神の御子、イエス・キリストだけが、そのことができます。そして、私たちは罪の赦しによって、罪の解決を得てはじめて、ほんとうの希望を持つことができます。私たちの信じる神は「希望の神」（ローマ 15:13）です。罪の赦しによって希望を与えてくださる神です。

三、希望と敬虔

ザカリヤは、さらに、罪の赦しがもたらす「きよく正しい」生活と、神への「奉仕」についても歌っています。74～75節にこうあります。「われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。」救い主イエスは私たちを「罪から」救ってくださいました。しかし、救いを「罪からの救い」と言うだけでは、それは、救いの半分しか語っていません。イエス・キリストは私たちを「罪から」どこに導かれるのでしょうか。私たちは「何に向かって」、「何のために」救われたのでしょうか。「罪が赦された」というのは、罪の中に留まっていてよいということではありません。

「罪から解放され、自由になった」というのは、勝手気ままに生きてもかまわないということでもありません。罪の赦し、罪からの解放は、「きよく、正しく」生きる

ことへと導くものです。エペソ 2:10 は「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」と、救いの目的を教えてください。イエス・キリストの救いは、私たちが罪から義に、不法から良いわざに、不敬虔から敬虔な生活へと導くものです。

そして、敬虔な生活とは、たんに、「罪を犯さないようにする」というだけではなく、もっと積極的に、「神に仕え、神のために生きる」ものです。ザカリヤが「恐れなく、主の御前に仕えることを許される」と言っている通りです。ザカリヤは自分の子どもヨハネについて、76-77 節でこう言いました。「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。」ザカリヤの子ヨハネは、この言葉どおりに、荒野に住み、悔改めを説き、人々にバプテスマを授ける者となりました。救い主イエスに先立って、救い主への道を備えることによって、救い主に仕えたのです。

「罪の赦しによる救いの知識を与える」、これは、バプテスマのヨハネだけに与えられた努めではありません。私たちにも同じ努めが与えられています。「罪の赦しによる救い」を知った私たちも、イエス・キリストによって過去が赦され、現在が守られ、将来への希望が与えられることを、人々に知らせることができます。それを証しする努めが与えられています。そのように、神を畏

れ、敬い、神に仕えるとき、私たちは、地上では、キリストを証ししたことが、いつか、どこかで実を結び、天では敬虔に生活したことが報われるという希望をさらに増し加えられるのです。

希望は神の言葉から来ます。私たちに与えられている希望は、すでに罪から救われ、今、罪の力から救われ、やがて、罪の存在からも救われるという希望です。そして、この希望が与えてくれるものは、「きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕える」生涯です。アドベントの第1週、神がくださった希望を自分のものとし、それによって確かな人生を送る者でありたいと思います。

(祈り)

すべての希望の源である父なる神さま、イエス・キリストによって与えられている希望のゆえに感謝します。人間の希望はやがて失望に終わりますが、あなたがくださる希望は決して失望に終わることはありません。それは、私たちを過去から解放し、現在に力を与え、将来に向かわせてくれます。そのことを感謝し、日々を歩む私たちとしてください。救い主、イエス・キリストのお名前前で祈ります。

平和を歌う

ルカ 2:8-14

2:8 さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。

2:9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。

2:10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。

2:11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

2:12 あなたがは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

2:13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。

2:14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」

イエスがお生まれになったとき、御使いが羊飼いたちに現れ、救い主の誕生を告げ知らせました。そして、「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」と歌いました。この賛美に「平和」という言葉があるので、「天使のキャンドル」が「平和」を表すものとなりました。

一、政治的平和

平和、それは、誰もが願うものです。しかし、平和といっても、さまざまな「平和」があります。人々がまず考えるのは、政治的な平和でしょう。イエスがお生まれになったとき、世界は、また、ユダヤは平和だったで

しょうか。ユダヤの国はどうだったでしょうか。ルカ 2:1-2 に、「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった」と記されています。この言葉は、イエスがお生まれになったときの世界の情勢やユダヤの状態を物語っています。ローマに皇帝が立ち、ユダヤの国がローマ帝国のシリア州に編入され、ユダヤは総督に支配される属国であったということです。

「皇帝アウグスト」の「アウグスト」というのは、皇帝に与えられた尊称です。実名はオクタ비아ヌスです。オクタ비아ヌスはジュリアス・シーザの甥にあたる人でした。シーザが暗殺されたときオクタ비아ヌスはまだ 18 歳で、留学中でした。叔父の死を聞いてローマに戻る途中、オクタ비아ヌスはシーザが自分を後継者にと願っていたことを知ります。そして、ローマの権力の頂点に立つことを志すのですが、それを急がず、元老院や政敵と争わず、政治的な手腕で帝国の権力を一手に握り、最初のローマ皇帝となりました。紀元前 27 年、オクタ비아ヌスが 35 歳のときです。76 歳で世を去るまで 41 年の間に、彼はローマ皇帝の地位をゆるぎのないものにしました。

皇帝アウグストは、ローマを強くするための政策を次々に行い、ローマ兵の待遇を良くして、士気を高めようとしていました。そのためには財源が必要でした。ローマ人は税金を免除されていましたから、彼は属国から税金

を取り上げることにしました。ルカ 2:1 に、皇帝アウグストが住民登録の勅令を出したことが書かれていますが、この住民登録は、属国の住民から税金を取り上げるためのものでした。自国のためならまだしも、ローマに税金を取り立てられるのは、ユダヤの人々にはがまんのないことでした。福音書によく登場する「取税人」は、ユダヤ人でありながら、ローマに雇われ、ローマのために自国民から税金を取り立てる人たちだったので、ユダヤの人々からずいぶん嫌われていました。

皇帝アウグストの時代、長年続いた戦争が止まりました。それで、ローマが世界にもたらした平和は "P a x R o m a n a"（ローマの平和）と呼ばれました。けれども、その平和は、他の国々がローマに隷属している限りの平和でしかありませんでした。ローマの平和を楽しんだのは、一部のローマ市民だけで、ローマの軍事力によって屈服させられた国々は、自由と独立とを失い、ローマの平和とはほど遠いところにあったのです。

今日、世界の目は東ヨーロッパでの戦争に注がれています。誰もが一日も早い停戦や終戦を望んでいます。水面下でさまざまな政治的な駆け引きがなされているのですが、政治的な解決だけでは、ほんとうの平和はやって来ないことを、私たちは知っています。国際的な調停で不利な立場になった国は、かならず、相手の国や他の国々に不信感を持ちます。

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）憲章に「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平

和のとりでを築かなければならない」とあるように、ほんとうの平和は政治的な駆け引きで作ることはできないのです。国と国、民族と民族、あるグループと別のグループとの間にある偏見や不信感、憎しみや恐怖といった、目に見えない戦争は、「政治的な平和」だけでは解決できないのです。

二、物質的繁栄

次に、「平和」とは物質的に豊かになることだと思われています。ヘブライ語では「平和」は「シャローム」と言います。「シャローム」は、旧約では、戦争や災害、ききんなど、生活を脅かすものから守られるだけでなく、豊かなもので満たされること、「繁栄」をも意味していました。申命記 28:4-5 には、「あなたの身から生まれる者も、地の産物も、家畜の産むもの、群れのうちの子牛も、群れのうちの雌羊も祝福される。あなたのかごも、こね鉢も祝福される」という約束があります。イスラエルの人口が増え、田畑からは豊かな実りがあり、家畜の群れが増えるというのです。「かごも、こね鉢も祝福される」というのは、台所で使うものに食べ物が常にあり、パンを焼くためのこね鉢に麦粉が尽きることがないという意味です。

国連は今年（2022年）11月15日に、世界人口が80億人に達したと発表しました。第二次大戦後、1950年には25億人でしたが、その時すでに、これ以上人口が増えれば食糧供給が追いつかなくなり、食糧の奪い合いが起って、世界規模の戦争が起こると言われました。飢餓や貧

困が戦争を生むのだから、みんなが豊かに暮らすために人口を抑制しなければならないと、皆が議論したものです。しかし、今、人口が3倍になっても、世界には、人々を養うだけの食べ物があります。もちろん、飢餓に苦しむ人たちも大勢いるのですが、そのほとんどは、食べ物がないためではなく、戦争や内乱によってその地域に食べ物を届けることができないことが原因です。食糧不足で戦争は起こりませんでした。逆に、戦争によって食糧不足が起こりました。田畑が荒らされたり、輸送路が断たれたからです。

モノの豊かさは、必ずしも平和につながりません。人の心には「貪欲」があって、豊かになればなるほど、「もっと欲しい」という思いが募ってくるのです。石炭は質の良し悪しはありますが、世界中のどこにでもある昔からあったエネルギー源でした。20世紀になってからは、石油が主要なエネルギー源となりました。近年、脱炭素が叫ばれてからは石油の代わりに、各国が、太陽光パネルやリチウム電池を作るための鉱物資源を奪い合うようになりました。そのために自然破壊が起こり、戦争が起こるようになりました。「環境を守ろう」、「平和な世界にしよう」という理想とは矛盾することが、実際には起っているのです。

聖書が教える「豊かさ」は決して、モノだけの豊かさではありません。神を信じなかったとき、私たちはモノの豊かさを追いかけてきたかもしれませんが、それによって心の平安を失ってきました。世界もモノの奪い合

いによって平和を失いました。聖書の「あなたのかごも、こね鉢も祝福される」との約束には、「あなたが、あなたの神、主の命令を守り、主の道を歩むなら…」（申命記 28:9）との条件があります。神を信じ、神に従うことから来る祝福だけが、ほんとうの意味で人を豊かにし、世界を平和にするのです。

三、神との平和

天使が告げた「平和」は、政治的な平和でも、物質的な繁栄でもない、神からくる平和、神との平和でした。

きょうの箇所には「すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた」（9節）とあります。「造られた者」である人間は「造り主」である神の前に、そのままで立つことはできません。死ぬべき存在でしかない人間、罪を持つ私たちは、永遠の存在であり、聖なるお方の前に立つ時、恐れおののくことしかできません。羊飼いたちが、神の栄光に照らされて、恐れ、怯えたのは当然です。ところが、御使いはすぐさま、羊飼いに「恐れるな」と言っています。なぜでしょう。人は、罪を犯して神に敵対し、神も、人の罪を裁かなければならなかったのですが、神が、世に、キリストを遣わし、人の罪を赦し、神と人との間に和解をもたらしてくださったからです。

御使いは言いました。「今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」（10-11節）「キリ

スト」には「油注がれた者」という意味があります。聖書で最初に「油注がれた」のは祭司でした。祭司は、人に対しては神を表し、神に対しては人々を代表して、神と人との間に立ち、神と人との仲立ちをする者です。ですから、「キリスト」というタイトルには、「神と人との仲立ちをする者」という意味があります。イエス・キリストは、人の罪を背負い、人に代わって神の裁きを受け、神と人との間に平和を作ってくださいました。コロサイ 1:19-20 にはこう書かれています。「なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。」これが天使の語った平和です。ですから、私たちは、神を怖がったり、怯えたりするのではなく、確信をもって、喜びをもって、また、感謝をもって、大胆に神に近づくことができるのです。そして、神との平和を持つ者は、心に平安を持つことができ、人と人との間に平和を作る者となることができるのです。

御使いは、羊飼いたちに、「あなたがは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです」（12節）と告げました。救い主は、本来なら王宮に生まれて当然です。ところが、家畜をつないでおく洞穴で生まれました。羊飼いたちは王宮には近づけません、家畜小屋なら、それは、彼らにとって親しいばしょです。ベツレヘムの町の家畜小屋がどこどこにあるか、彼らはよく

知っていました。飼葉桶に寝かされている赤ちゃんを見つけたのに苦勞はいらなかったと思います。イエスは神の御子であるのに、神としての栄光を捨て、低く、貧しい姿で世に来てくださいました。それは、誰もが、恐れなく、救い主に近づくことができるためだったのです。

皇帝アウグストの「アウグスト」という称号には「崇高なる者」という意味があり、皇帝は「神の子」、「救い主」とも呼ばれました。そして、皇帝が赦免を布告するとき、それは「福音」と呼ばれたのです。ローマの皇帝は、ローマの最高の祭司であり、自らをも神としました。アウグストは神になろうとし、神の栄光を奪い取りました。しかし、今日、アウグストは歴史の資料の中に名を残すだけで、彼をほめたたえ、祝う人は誰もいません。けれども、彼の時代にローマの属国でひっそりとお生まれになったイエスは、今も、世界中の人々に愛され、慕われ、礼拝されています。イエスを信じる人々は世界人口の三分の一、26億人いると言われています。アウグストの時代の「ローマの平和」はやがて消えて行きましたが、イエスがもたらしてくださった「平和」は、今も続き、世界に広がっています。天使たちが「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」と歌った「平和」はイエス・キリストによって実現し続けているのです。

初代教会はこの天使の賛美をそのまま教会の賛美歌にしました。「栄光の賛歌」（グロリア）です。それはラテン語で *"Gloria in excelsis Deo: et in terra pax hominibus*

bonae voluntatis." と歌われます。伝統的な礼拝形式を採用している教会では、この賛美は礼拝のたびごとに歌われます。礼拝とは、神の栄光をほめたたえることであり、神との平和を願い求めることだからです。救い主イエス・キリストによって与えられている「神との平和」なしに、私たちは「神の栄光」に近づくことはできません。とくに、このシーズンには、イエス・キリストが、私たちの平和である、イエスは十字架で平和を作ってくださいました。そのことを覚えて、天使たちの歌に合わせ、神を賛美したいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、私たちのために救い主キリストを遣わしてくださいました。イエス・キリストは、私たちの罪の赦しのため、ご自分を献げ、あなたと私たちの仲立ちとなり、私たちに和解と平和をくださいました。私たちは、あなたとの平和をいただいて、恐れなくあなたに近づくことができます。クリスマスに向かう、このシーズンに、あなたの恵み深い栄光を、精一杯ほめたたえることができるよう、私たちを導き、助けてください。私たちの平和、イエス・キリストのお名前です。

喜びを歌う

ルカ 1:39-45

1:39 そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。

1:40 そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。

1:41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。

1:42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。

1:44 ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。

1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

クリスマスが近づくと、「アヴェ・マリア」の曲が、あちらこちらで聞かれるようになります。モーツァルト、シューベルト、メンデルスゾーン、ブラームス、グノー、ヴェルディなど、著名な作曲家が、それぞれの「アヴェ・マリア」を作曲しています。「アヴェ・マリア」の歌詞は、「受胎告知」のときの御使いの言葉、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」（ルカ 1:28）と、「エリサベツ訪問」のときのエリサベツの言葉、「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています」（ルカ 1:42）とを組み合わせて作られています。「アヴェ・マリア」はラテン語で歌われることが多いのですが、日本語では、「アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにお

られます。あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています」となります。

中世には、この「アヴェ・マリア」に、マリアが御使いに答えた言葉と、ヨハネ 1:14 が加えられ、「お告げの祈り」（アンジェラスの祈り）というものが作られました。次のように祈ります。

主のみ使いのお告げを受けて、

マリアは聖霊によって神の御子を宿された。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」

「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」

「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」

神よ、み使いのお告げによって、御子が人となられたことを知ったわたしたちが、キリストの受難と十字架をとおして、復活の栄光に達することができるよう、恵みを注いでください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

一、受胎告知

ルカの福音書は、マリアが神の御子を宿したことから書き始めています。福音の中心は十字架と復活ですが、テモテ第二 2:8 に「私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫

として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」とあるように、救いの御業はイエス・キリストの誕生から始まりました。神の御子が人となって世に来られなければ、そのあとに続く、十字架の贖いも、復活による救いもありません。ですから、使徒信条は、「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ…」と言っているのです。救いの御業が、御子が処女の胎内にやどられたことから始まったと言っているのです。そして、使徒信条が、わざわざ「マリア」の名を記しているのは、神が、全人類、全世界の救いのために「人」を用いられることを教えています。神は、人をお救いになるのに、人と無関係なところでそれを実現されませんでした。救いの御業は天で行われたのではなく、地上で行われたのです。神の御子が人となり、人類の歴史の中に入ってこられ、私たちと同じように人生の苦しみを味わい、それによって人を救われたことを言い表しています。

クリスマスの9ヶ月前御使いがマリアに現れ、「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」（ルカ 1:28）と言いました。「アヴェ・マリア」の「アヴェ」は、御使いが言った「おめでとう」をラテン語で言い換えたものです。英語では“Hail”で、「挨拶します」、「歓迎します」、「称賛します」という意味です。「アヴェ・マリア」の歌では、母マリアに対する尊敬や敬愛を表す意味で使われていますが、もとのギリ

シャ語では「喜べ」という言葉が使われています。御使いはマリアに「喜べ」と言ったのです。御使いはマリアに、「あなたは神から選ばれ、神の御子を産み、救い主の母になる」と告げましたが、それはあまりにも、大きなことで、マリアには理解できないことでした。しかも、突然のことで、「喜べ」と言われても、すぐには喜べるものではありませんでした。けれども、マリアは「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」と言って、神の言葉を受け入れました。

二、エリサベツ訪問

御使いが告げた言葉を受け入れたマリアでしたが、彼女はまだ年若く、未婚のでしたから、「これからどうなるのだろう」という不安が、きっとあったと思います。それで神は、彼女を祭司ザカリアの妻で、叔母にあたるエリサベツのところに導きました。エリサベツには長い間子どもが与えられず、高齢になって妊娠し、6ヶ月を迎えていました。マリアはエリサベツの身の周りの世話をするために、エリサベツを訪ねたのです。

当時のユダヤの社会では、年下の者は、年上の人に、しもべやはしためのようにして仕えました。40節に「そしてザカリアの家に行って、エリサベツにあいさつした」とありますが、エリサベツはマリアよりうんと年長でしたから、たとえ、親戚とはいえ、ていねいにおじぎをして、「叔母様のお世話をするためにまいりました。

何なりとお申し付けください」などと言ったことでしょう。

ところが、エリサベツの返事は、マリアが考えてもいないものでした。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。」（42-43節）エリサベツがマリアを敬っているのです。これは、御使いがマリアに告げたことを裏打ちするものでした。マリアは、エリサベツの言葉によって、自分が神の御子をやどしていることを確信することができたことと思います。マリアは、こののち、エリサベツのところにも3ヶ月滞在しますが、その期間にも、エリサベツから多くのことを聞き、「主の母」となる備えをしていったのだと思います。

私たちは、一人ひとりが神の前に立ち、神の言葉を聞かなければなりません。けれども、日常生活の中で御言葉に従っていくためには、やはり、他の信仰者との交わりが必要です。御言葉が生活の中でどのように働いたかを聞き、また語り合うことによって、より一層、御言葉を理解し、また、御言葉を実行することができるようになります。今では、電話やメールなどがありますから、身近な人とだけでなく、遠く離れた人とも語り合うことができますが、共に集まるときに信仰の交わりをすることは、誰にも必要なことです。

エリサベツはさらに、こう言いました。「ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私

の胎内で子どもが喜んでおどりました。」（44節）ザカリヤとエリサベツの子は、やがて「バプテスマのヨハネ」と呼ばれ、イエスが救い主として活動を始める準備をする人となります。そのヨハネと、イエスとが、互いに胎児のときに出会っているというのは、不思議な神の取り計らいです。マリアがエリサベツを訪ねたことは、マリアが自分の使命を確認するのに必要だっただけでなく、エリサベツが、わが子に与えられた使命を確認するためにも必要なことだったのです。

エリサベツは、マリアに言いました。「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」（45節）これは、マリアが御使いの言葉を聞いたとき、「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」と、神の言葉を信じたことをさしています。この時、エリサベツは、御使いが現れたことや、御使いが告げたことを何ひとつ聞いていません。しかし、聖霊に示され、マリアの信仰の本質を見抜いて、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」と言ったのです。「新改訳二版」だけが、ここを「信じきった」と訳しているのは、動詞の「完了形」が使われているからでしょう。これは、マリアが、いったん信じたことに堅く立ち、その信仰にとどまっていることを言い表しています。私たちも、神の言葉をただ聞く、読む、よく理解して受け入れるだけでなく、そこに立つ、つまり、「信じきる」ことが大切で

す。そのとき、神の言葉は私たちの内に働くものとなるでしょう。

「主の母」と呼ばれる幸いは、マリアにだけ与えられた幸いです。他の女性には、この特権は与えられていません。しかし、マリアと同じように、「主によって語られたことは必ず実現する」と信じる幸い、そして、主の言葉が実現するのを見る幸いは、男性であっても、女性であっても、誰にでも与えられます。神が、ご自分の御子を遣わし、この世界を救うために、人を用いられたのなら、その救いのメッセージを、より多くの人に知らせ、証しするために、私たちを用いてくださらないはずがありません。神がマリアを選び、用いてくださったのは、マリアに特別な力があつたからではありません。彼女は、ナザレの村でも、あまり目立たない女性だったかもしれません。しかし、彼女は、御使いが言った「神にとって不可能なことは一つもありません」（37節）との言葉を信じました。人間の力ではなく、神の全能を信じたのです。マリアは、その信仰のゆえに神に用いられたのです。

神は、ひとりの女性を通して世に救い主を遣わすことを預言しておられました。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」（創世記 3:15）や、「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」（イザヤ 7:14）などの神の言葉

は、マリアにより、マリアを母として生まれたイエスによって実現したのです。救いを成し遂げるのは神です。しかし、神は、救われる側の人間を無視して一方的にものごとをなさるのではありません。特別な、不思議なしかたで人をご自分の救いのご計画の中に組み込んでおられます。そして、神が、そのために私たちに求められるのは、信仰です。神の言葉は、私たちの信仰を通して実現し、神が私たちに求めておられる信仰は、神の言葉が実現すると信じる信仰です。

そして、この信仰から「喜び」が生まれます。パウロは、神の言葉を信じ、受け入れることから来る「喜び」について、こう言っています。「あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました」（テサロニケ第一 1:6）と言いました。ペテロも同じように、信仰による喜びを、こう書いています。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています」

（ペテロ第一 1:8）と言っています。目に見えるものだけに頼っていると、失望し、喜びを失くしてしまいます。しかし、神の言葉を信じ、神の言葉に満たされるなら、たましいに喜びが湧いてきます。

以前奉仕した教会で、今はもう亡くなられましたが、よく主に仕え、また、人にも仕えていたひとりの姉妹がいました。彼女は、何かあると、そばにいる女性の肩を

たたいて「恵まれた女よ、おめでとう」と言って、他の姉妹を励ましていました。そう言われた人も、それを喜んでいました。自分が主から恵まれている、祝福を受けている。そのことを自覚し、確信し、それを喜ぶことは、とても大切なことです。天使がマリアに「おめでとう（喜べ）、恵まれた方」と語った言葉は、今も、私たちに語られているのです。御言葉、信仰、そして、喜び。このクリスマスに、この三つのものが結びつき、一つとなるのを体験したいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、片田舎に住む一人の若い女性を、あなたのお子の母として選ばれました。彼女は、あなたのお力がすべてを為し、あなたのお言葉に現れた真実が必ず実現すると信じました。彼女は、信仰によって、あなたの救いの計画に参加しました。私たちも、精一杯の信仰をあなたに捧げます。それを祝福し、受け入れ、用いてください。私たちを信仰の喜びで満たしてください。主イエスの御名で祈ります。

愛を歌う ルカ 1:46-55

- 1:46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、
1:47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。
1:48 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。
ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思おうでしょう。
1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、
1:50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。
1:51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、
1:52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、
1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。
1:54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。
1:55 私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

ルカの福音書の1章と2章には4つの賛美がしるされています。「マリアの歌」（1:46-55）、「ザカリヤの歌」（1:68-79）、「天使の歌」（2:14）、「そして「シメオンの歌」（2:29-32）です。「ザカリヤの歌」は「希望」を歌い、「天使の歌」は「平和」を歌っていましたが、「マリアの歌」は、「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました」（54節）とあるように、神の「あわれみ」を歌っていま

す。「あわれみ」は、苦しむ者、悩む者、また、必要が満たされないでいる人に対する愛を指します。ですから、マリアはここで、神の「あわれみの愛」を歌っていることとなります。では、神の「あわれみの愛」とは、どのような愛でしょうか。マリアの歌から、そのことを学びましょう。

一、共に苦しむ愛

神の「あわれみの愛」とは、苦しむ者に対する愛です。神の愛は、誰にも、いつでも必要なものなのですが、とくに、悩み、苦しむときには切実に、その必要を感じることでしょう。実際、人が神を信じるようになった、多くの場合は、悩みや苦しみを通してです。

ふだん、神に祈ったり、感謝したりしていないのに、困った時や大変な目に会ったときだけ、「神さま、助けてください」と祈ることを、「苦しい時の神だのみ」と言います。少しばかり、軽蔑の意味が込められた言葉ですが、聖書は、たとえ「苦しい時の神だのみ」であっても、苦しむ者が「助けてください」と真剣に祈るとき、神は、決してそれに耳を塞がれないと、教えています。

「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」（詩篇 50:15)

ユダヤの人々は神に愛され、選ばれたのに、神に背きました。そのため、イスラエルは、絶えず圧迫、侵略を受けてきました。それでも、彼らは、神に立ち返りませんでした。神が何度も悔い改めを呼びかけたのに、その

呼びかけを無視して、自ら滅びの道に突き進みました。そして、国を滅ぼされ、イエスの時代には、ユダヤの人々はローマの支配のもとに苦しめられていました。

その苦しみは、いわば「自業自得」の苦しみでした。しかし、それでも、神は、彼らの苦しみをご自分の苦しみであるかのようにして、彼らをあわれみ、救いの手を伸べてくださいました。イザヤ 63:9 にこうあります。

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」この言葉は、神のあわれみの愛を見事に言い表しています。「あわれみ」とは、「同情すること」と定義されることがありますが、神の「あわれみ」は、たんなる同情以上のものです。それには行動が伴います。神は、そのあわれみの愛のゆえに、苦しむ者のために何かをせずにはおれないのです。苦しんでいる人のところにまで降りきて、そのそばにいてくださるのです。神の「あわれみの愛」は苦しむ者と共に苦しんでくださる愛です。

あわれみ深い神は、苦しみの中にある人々とともに住むために、天から、この地上にまで来てくださいました。それが、神の御子の降誕です。クリスマスは、この神のあわれみの愛を覚える時なのです。

二、力強い愛

第二に、神のあわれみの愛は力強い愛です。ある人は「あわれみ」という言葉を「弱々しいもの」と感じるか

もしれませんが、神のあわれみは、決して、そのようなものではありません。マリアは言っています。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」(51-53節)神のあわれみは、「低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせる」だけでなく、「権力ある者を王位から引き降ろし」、「富む者を何も持たせないで追い返す」ものでもあるのです。神のあわれみは、力のない者たちに向けられてはいますが、決して力のないものではありません。それは、弱い者を苦しめている、力ある者たちを裁くものでもあるのです。

ほんとうの意味での救いは、苦しむ者が苦しみから救い出され匿われるだけでなく、正しい者を苦しめている者が取り除かれることにあります。しかし、人間のあわれみは、苦しむ人々を助けることはできても、その人たちを苦しめているものを取り除くことはできません。人が神に代わって無理にしようとする大きな間違いを犯すことがあります。それができるのは、ただ神だけです。高い地位について権力をふるっていた人が、その権力を奪われ、その地位から追放されることも、大きな資産を持っていた人がたちまちそれを失うことなどは、過去にも現在にも多くありました。たとえ今、弱さの中にあつたとしても、辛い目に遇っていても、それもいつま

でも、永遠に続くものではありません。正しい人の正しさが明らかになるときがかならずやってきます。たとえば、不正や不法が支配し、悪が栄えていたとしても、やがて、それらが裁かれ、正しい者が報いを受ける時がやって来ます。私たちは、神が「あわれみ」の心と「力ある腕」の両方を持っておられることを知り、信じています。ですから、神に頼り、神に希望を置くのです。

三、変らない愛

第三に、神のあわれみの愛は、いつまでも変わりません。いままで変わることはなかったし、これからも変わりません。マリアは言いました。「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」（54-55節）人間のあわれみは一時的です。気の毒な人々を見て、かわいそうに思いますが、そうした同情心は、ふつうは長くは続きません。まして、自分がよくしてあげた人から、不平や不満を言われたり、裏切られたりしたら、「あわれみ」の心が「恨み」の心に変わり、「敵意」にならないとはかぎりません。しかし、神は、何度も神に不平を鳴らし、神に背いた神の民を見捨てませんでした。神のあわれみは実に、忍耐深いのです。詩篇136篇は「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」という言葉で始まっていますが、そのあとの節にも「その恵みはとこしえまで」と繰り返されています。

す。神の恵みやあわれみは尽きることがありません。神のお心からわきあがり、流れ出て、決して枯れることはありません。

聖書にあるイスラエルの歴史は、私たちに無関係なものではありません。イスラエルの歴史は、全人類の歴史を映し出しているもの、それを凝縮したものです。イスラエルが神に逆らったように、すべての国の人々は、私たち一人ひとりも神に逆らってきました。しかし、神は、イエス・キリストによって、ユダヤの人々に示されたあわれみを、そのまま、すべての人々に向けてくださいました。旧約の神の民へのあわれみは、そのまま、新約の神の民、つまり、キリストを信じる人々に受け継がれているのです。

この神のあわれみを知るとき、私たちはへりくだらないではおれません。マリアがエリサベツを訪ねたとき、エリサベツはマリアを「主の母」と呼んで、称賛しました。けれども、マリアは、思い上がったりしませんでした。むしろ、「主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです」と言って、さらに自分を小さくしました。「主の母」となるという役割が与えられた自分を大きく見せるのでなく、そのような恵み、あわれみを与えてくださった神を「大きく」したのです。マリアの歌は「あがめます」という言葉で始まっているのですが、これはラテン語で「マニフィカト」(Magnificat)と言います。ここから英語の "magnify" という言葉が生まれました。拡大鏡を "magnifying glass" というように、"magnify"

には「大きくする」という意味があります。「主をあがめる」とは「主を大きくする」ことです。もちろん、主なる神はもともと偉大なお方で、人間によって大きくしてもらわなければならないのですが、この言葉には、「主の偉大さが、小さな私を通して表わされますように」という意味が込められています。

神の栄光を表すのに、私たちの小ささや欠けは妨げになりません。パウロは、かつて、教会を迫害する者でしたが、救われて、キリストの使徒となりました。パウロを変えたのは、神のあわれみでした。彼はこう言っています。「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。…しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」（テモテ第一 1:13, 16）パウロの過去は、彼がキリストを証しするのに妨げにはなりませんでした。むしろ、彼の回心を聞いた人々は、それによって神をあがめました。ですから、私たちも、「神さま、小さく、欠けだらけで、失敗の多い者であっても、私を通して、あなたの素晴らしさが大きくあらわされますように」と祈ることができるのです。

このクリスマス、神が、そのあわれみを忘れず、私たちをかえりみて、御子イエスを送ってくださったことを

覚えましょう。そして、マリアのように心から主をあがめましょう。

(祈り)

主なる神さま、あなたの深いあわれみは、どんな苦しみの中にある人にも届き、あなたの力強いあわれみは、どんな困難、悩み、苦しみからも、私たちを救い出してくれます。そして、あなたのあわれみはいつまでも変わることがなく、私たちと共にあります。私たちの只中に来てくださった御子イエスに、あなたのあわれみの愛を見、その愛を高らかに賛美する者としてください。主イエスのお名前です。



Penguin Club

www.penguinclub.net